

被害防止能力を高める「安全マップづくり」の取組

—第5学年総合的な学習の時間「地域の安全を考えるプロジェクトI」の実践—

上越市立大町小学校 校長 丸田 勲
〒943-0833 新潟県上越市大町3-2-32 Tel (025)523-7245

I 学校の規模及び地域環境

1 学校規模

学級数12学級 児童数286名 職員数25名

2 地域環境

新潟県上越市高田地区の市街地に位置し、商店街の本町通り、朝市でにぎわう大町通り、古い町屋が軒を並べる仲町通り、旧城下町の寺院群が立ち並ぶ寺町通り、比較的新しい住宅街である北城町内と、校区の地域状況は多様である。地域住民や保護者の教育に対する関心は高く、PTA活動も大変活発である。校区内には、交通量の多い県道や市道が多く、また、JR信越本線高田駅もあることで、多くの人々が往来する。その反面、旧城下町特有の小径も多く、日中に人通りの少ない通りも多く存在している。そのため、交通安全指導だけではなく、防犯に向けた地域全体での対策や活動も求められている。

II 取組のポイント

- 1 今日的な課題である「防犯」について取り上げ、子どもたちの主体的な活動を目指した「総合的な学習の時間」の実施
- 2 子ども視点からの安全マップ作成を通じた、子どもたちの被害防止能力の育成
- 3 作成された安全マップを使用し、全校の子どもたちに防犯を呼びかけた「町別子ども会」の実施
- 4 保護者や地域、行政や警察との協力・連携

III 取組の概要

1 大町小学校5年「総合的な学習の時間」の取組

当校では「総合的な学習の時間」の名称を「わくわく学習」としている。全体計画の「共に生きる」ことと「新しさやオリジナリティーを求める」ことの2つの視点を受け、第5学年では「人と出

会い、かかわり合い、私の生き方を見つめる」ことを年間のテーマにした「DREAM TEAM プロジェクトI-会・合・私-」活動に取り組んでいる。

その趣旨は、自らの力で活動を立ち上げている人と出会い、対話しながら活動をする場を繰り返し設定する。そして、多くの人々とかかわり合う中で感じたり、考えたりしたことをシートや名言集に書きためながら、自らの生き方を見つめていくことができるようにすることである。

最初の活動は、1年生とともに朝読書の時間を過ごすことであった。当校では、週3回の朝読書の時間が設けられており、約10分間、子ども・教職員全員で朝読書に取り組んでいる。入学したばかりの1年生の朝読書を助け、かつ、自分たちも楽しむことをめあてに活動に取り組んだ。事前に担当する1年生や読む場所を決め、練習をして絵本などの開き読みを行ったが、うまくいかない子どもが多かった。そこで、お互いの悩みや工夫を話し合ったり、地元の読み聞かせの会の皆さんより協力を得たりしながら活動を進めていった。この活動を通じて、子どもたちは「どうしたら1年生も自分も満足できる朝読書ができるのか」と試行錯誤しながら学んでいった。

続いての活動は、妙高で行われる宿泊体験学習が舞台である。自然学校の指導員や国立妙高少年自然の家の職員と出会い、一緒に活動することで、その生き方や自然から多くのことを感じとったり、学んだりすることをめあてに取り組んだ。また、子ども一人一人が役割を担い、それぞれが自分の仕事に責任をもって取り組んだり、仲間と相談したりしながら、自分たちの力でよりよい活動に高めていった。妙高の自然の中、出会った人々や仲間と共に活動を行うことで、「今、自分は何をすべきなのか」ということを繰り返し自問する経験を重ねた。

これらの活動で培ってきた自分を見つめる力を生かし、「地域の安全を考えるプロジェクトI」を計画した。防犯の基本は「自分の身は自分で守る」こと

にある。この考えは、自立した個人に求められてこそ効果を発揮するものであり、単発の活動として行うよりも、「総合的な学習の時間」の年間計画に位置付けて取り組むことで、子どもたちの被害防止能力をより効果的に高めることができると考えた。

2 「地域の安全を考えるプロジェクト」の意図

(1) 活動のねらい

「地域の安全を考えるプロジェクト」を実施するにあたり、以下のような「ねらい」を設定した。

ア 私たちの暮らしを守る人々とかかわり合う中で、地域の安全を守る活動や防犯に対する地域の人々の願いに気付かせ、自分たちには何ができるかを考え、実行しようとする態度を育てる。

イ 子どもたちが自らの通学路や町内の犯罪が起りやすい所や危険な場所を調査し、安全マップを作成することを通して、安全への意識を高め、危険を予測し回避できる能力を育てる。

(2) 安全マップ作成の意図と留意点

安全マップの作成を通じて、子どもたちの被害防止能力を高めることがねらいであって、安全マップ自体はその過程の中でできあがる。

それゆえ、子どもたちの意識の中で、安全マップの作成＝活動終了とならないように配慮する必要がある。したがって、作成前後の活動が重要であると考え、本活動を「総合的な学習の時間」に位置付けて取り組むことにした。

こうすることで、「人と出会い、かかわり合い、私の生き方を見つめる」という第5学年の活動テーマとの間に整合性が生まれ、教師の側で目指すべき具体的な子どもの姿を明確にイメージできるようになり、より「人」や「地域」を意識した安全マップづくり活動を計画し、実践することができるようになった。

3 活動計画（全10時間）

「地域の安全を考えるプロジェクト」は、以下の計画によって実施することにした。

(1) 一次（1時間）

身の回りに潜む危険について、自分や友達の体験を振り返り、意識することをねらいとした。

- あなた自身、または友達で「怖いこと」にあった人はいませんか？（1）
- ・自分たちの体験を話し合い、身の回りに潜む危険について意識する。

(2) 二次（7時間）

「自分の命は自分で守らなくては」と意識し、安全マップの作成を通じて、あらゆる危険から身を守るにはどうすべきかを考えることをねらいとした。

(1) 私たちの暮らしを守ってくれる人達からお話を聞こう。（1）

- ・地域パトロールを実施している人や警察署員から話を聞き、地域を守ることへの願いや安全マップ作成のポイントや心構えを学ぶ。

(2) 安全マップを作ろう…私のめあて、班のめあて（1）

- ・安全マップの作成を前に、沖縄県で実践されたマップづくり活動のVTRを視聴し、活動へのイメージをもつ。また、個人や班のめあてを立てて、調査・作成に向けた子どもたちの意識を明確にする。

(3) 安全マップを作ろう…町の調査（3）

- ・保護者ボランティアや職員と一緒にフィールドワークを行い、通学路や自分の町内に危険な場所がないか調査する。

(4) 安全マップを作ろう…調査に基づいた安全マップの作成（2）

- ・調査した危険な場所を、班で相談しながら分かりやすくまとめ、安全マップを作成する。

(3) 三次（2時間）

本活動を通じて学んだことを多くの人に伝えて安全に過ごすよう呼びかけたり、自分自身も毎日の生活で注意するように心がける態度を養うことをねらいとした。

(1) 全校のみんなに伝えよう…「町別子ども会」での発表準備（1）

- ・作成した安全マップを分かりやすく全校の子どもたちに伝えるため、班ごとに発表の担当を決め、発表に向けた準備や練習をする。

(2) 全校のみんなに伝えよう…「町別子ども会」での発表と集団下校での説明（1）

- ・作成した安全マップを分かりやすく全校の子どもたちに伝えて、注意を呼びかける。また、登校班で実際に歩いて下校し、現地においても確認をする。

なお、単元を通じて、活動シートに記入したり、節目となる活動ごとに作文を書いたりする。

4 安全マップ作成に向けた子どもたちへの指導

効率的に安全マップの作成を行うため、事前指導として、以下のような指導を行った。

(1) 全体への指導

班員全員が共通意識をもって、安全マップ作成に向けた調査活動を行うため、全体で以下のキーワードとチェックポイントを確認した。

【キーワード】

「入りやすい場所、見えにくい場所」を探そう …領域性が低く、監視性も低い場所

領域性：犯罪者の力が及ばない範囲を明確にすること

監視性：犯罪者の行動を把握できること

【チェックポイント】

- ① 高い生け垣、塀がある
→周囲から見えにくい
- ② 大きな道路が近くにある
→犯人が逃げやすい
- ③ 駐車場や空き地、植え込みがある
→大人の目が届かない
- ④ 公園
→公園によっては誰にも見つからず、犯人が何かをできる空間がある
- ⑤ ビルとビルのすき間や空き地
- ⑥ 人通りの少ない住宅地
- ⑦ 人通りの少ない歩道

(「地域安全マップづくり」講演会資料より作成)



【調査場所の一例】

(2) 担当する係ごとの指導

5年生の子どもたち51名を13班に編成し、校区の17町内全域を調査できるようにした。また、各班には保護者ボランティアか職員のいずれかが必ず同行するようにした。

調査活動は班単位で行うため、班毎に地図係、写真係、インタビュー係の3つに役割を分担し、一人一人が役割を担い、それぞれが自分の仕事に責任をもって取り組めるよう指導を行った。



【町へ出かけての調査活動】

5 実際の活動に向けた事前の準備・指導

子どもたちの活動が円滑に進むよう、以下のような準備を行って活動に臨んだ。

(1) 事前準備として

ア 安全主任との打ち合わせ

「地域安全マップづくり」講演会（6月）の内容伝達と活動構想の立案

イ 沖縄県での実践VTRの視聴

(2) 一次の活動の前に

ア 講師の依頼と打ち合わせ

実際に校区内でパトロールに携わっている人と地域の安全を守る警察署員を講師として招いた。そして、活動の意図を理解して、子どもたちに話をしてもらえるように事前打ち合わせを行った。

(3) 二次の活動の前に

ア 保護者ボランティアの依頼

調査当日、町内巡回時の児童の安全確保や調査活動への助言や補助のため、保護者にボランティアを依頼した。

イ 安全マップ作成の際に必要な物品の準備

言葉だけではその場の状況が伝わらないので、カメラが必要である。調査後に印刷をして、すぐに安全マップ作成作業に取りかかることのできるデジタルカメラを用意した。

(4) 三次の活動の前に

ア 全校の子どもたちへの伝達

調査するだけでなく、調査結果を全校の子どもたちに伝える場を設けることで、全校の子どもたちの安全への意識や被害防止能力を高めるように努めた。夏休み前という時期もあり、「町別子ども会」の場で発表の機会を設けた。

イ PTA育成委員、町内連絡委員への周知

集団下校の際には、PTA育成委員、町内連絡委員にも活動を周知し、参加を依頼した。

6 子どもの姿と評価・支援

(1) 子どもたちの主体的な活動への支援

「総合的な学習の時間」として取り組んだことで、子どもたちの意識の高まりについて評価し、支援することが可能となった。

一次を終えた時点での子どもの意識がどのような状態にあるのかを、シートに記入することで確認した。これまでに不審者に直接出会った、見かけたと認識している子どもは少なく、人伝えに聞いた話やニュースのことを記入したりする子どもたちが多かった。

つまり、自分のこととして活動を行う素地が形成されていないと考えられ、別の角度から子どもたちの意識にせまる必要性に気付くことができた。そこで、講師として依頼した地域の方に、パトロール活動を通じての感想だけでなく、地域としての願いも語ってもらうように依頼することにした。



【防犯活動に携わる人からの講話】

(2) 子どもの視点での調査活動への支援

実際の調査活動では、子どもたちはなかなか危険な場所に気づくことができなかった。

そこで、調査活動の前に全員で確認したキーワードとチェックポイントをもう一度読み返し、自分の言葉で置き換えるように促したところ、「不

審者が入りやすくて見えにくい」から「子どもが入りやすくて見えにくい」と自分たちで考えて見方を変えていった。こうして、実際に歩きながら、自分たちの視線で「ここはなんだか怖いね」と素直に感じるができるようになり、さらに「自分たちは大丈夫だけれども、もっと小さい子は奥で見えなくなるね。」と見方や対象が広がっていく様子を見ることができた。



【実際の調査活動の様子】

全員が集まって安全マップを作成した際にも、同様の意見を挙げて危険場所に選んだ班が他にも見られ、防犯についての見方や対象が広がった子どもたちが多くなっていた。また、活動後に記入した作文では、以下のように記述していた。

○危険な場所で一番多かったのはアパートの裏です。アパートの裏は、塀があったり人がいても見えなかったりする所です。それに薄暗くて、犯人はすぐに逃げることができます。こういうアパートの裏には気を付けたいと思います。

○今回の調査から、自分の身を守るために気を付けたいことは「違う見方で見る」ということです。常に「危ないかも」という見方で見れば、危険な場所は結構あるのではと思います。

○最もびっくりしたのが○○高校前の道です。部活などの帰りに、友達と別れて一人で歩いています。これからは、よく気を付けたいです。

※この班は、高校の長い壁、体育館の裏、大きな街路樹、道路のそばということを考え、この場所を危険と判断した。

他にも具体的な理由を挙げて注意したいと記述

する子どもたちが多くあり、安全マップづくり活動を通じて、危険から自分の身を守るにはどうしたらよいかと考える子どもたちが増えていることが分かる。さらに、これまで通学してきたにもかかわらず、その危険に気づくことができなかった自分に気づくこともできた。

(3) 全校の子どもたちに呼びかける「町別子ども会」への支援

三次では作成した安全マップを用いて、全校の子どもたちに向けた発表を行った。この活動は、安全マップの作成だけで活動を終了させず、さらに人とかかわりをもつことで、「自分に何ができるか」を考えたり、全校の子どもたちが安全への意識を高めたりする場として設定した。

発表の場である「町別子ども会」には、1～6年生が集まる。他人に分かりやすく伝えるためにはどうすればよいか、特に小さな1年生に分かりやすく教えるためにはどんな工夫をすればよいかと、班毎に話し合う姿が見られた。そして、安全マップを色分けしたり、シールを貼ったりするなどの工夫を加える班や、町内で危険だと思われる場所を一通り説明した後で、注意すべきポイントをつけ加える班などが見られた。

調査した子どもたち自らが、自分の視線で作成した安全マップを用い、同じ町内に住む子どもたちが危険な目に遭わないようにと真剣に発表したことで、説明を受けた全校の子どもたちも、より身近なこととしてとらえることができた。

そのため、後日行われた冬休み前の町別子ども会では、他学年の子どもたちからも危険な場所が示されるなど、全校の子どもたちの意識が高まっている様子が見られた。



【集団下校中にポイントを説明する子どもたち】

(4) 保護者や地域、行政や警察との協力・連携

講師の話を聞いた後、子どもたちの意識が高まっているかをシートに記入することで確認したと

ころ、子どもたちの多くが自分のこととして考えていることが分かった。特に、「自分の命は自分で守る」という言葉は、警察署員の話とも重なり、名言として書きためている「名言集」に記す子どもの姿を見ることができた。

また、安全マップの調査活動や作成、並びに集団下校の際には、保護者や地域住民、行政職員に協力をお願いした。平日のご多用な中にもかかわらず、多数の協力を得たことにより、保護者や地域の人々がいかに子どもたちの安全について真剣に考えているかということ子どもたちは身をもって感じることもできた。



【安全マップ作成に参加する保護者】

7 活動を終えて～成果と課題～

(1) 本活動における成果

ア 安全マップづくりを「総合的な学習の時間」の年間計画に「地域の安全を考えるプロジェクトI」活動として位置づけた。このことにより、安全マップづくりのみで活動を終了させず、くらしの安全を守る人の話を聞いたり、多くの人に活動の成果を伝えて安全に過ごそう呼びかけたりするなど、活動前後の指導を重視することができた。子どもたちにとって、自分自身が生活の中で注意するように心がける気持ちを養う上で、より効果的であった。

また、「人と出会い、かかわり合い、私の生き方を見つめる」ことを年間のテーマとした、これまでの活動で培ってきた自分を見つめる力を生かして本活動を計画・実施したことで、これまでの自分を振り返り、自分の身は自分で守らなくてはならないという、安全への意識を高めることができた。

イ 夏休みが終了した9月初旬のことである。不審者情報を子どもに伝えながら、ふと子どもたちに「怖い目に遭わないためにはどうするの」

と教師が尋ねたところ、子どもたちからは「逃げる！」という声とともに、「入りやすく見えにくい場所に一人で行かない！」という声が素早く挙がった。このように、毎日の生活でも注意する姿勢が見られることから、子どもたちの視点で取り組む安全マップづくり活動は、子どもたちの被害防止能力を高める上で効果があった。

ウ 長期休業の前に実施される町別子ども会で、安全マップを改めて確認し、他学年の子どもたちの意見も取り入れて、安全マップを随時更新していくことで、全校の子どもたちの安全に対する意識を高揚することができた。

エ 保護者や地域、行政や警察との協力・連携を図ったことにより、本活動を通して安全マップを作成したことが周知された。そして、地域からの要望に応じて出来上がった安全マップを配布したことなど、子どもたちだけではなく、地域の安全に対する意識を高めることにもつながった。

(2) 課題

ア 子どもたちがくらしの安全を守る人々に出会い、話を聞いたことで、子どもたちや地域の安全を守ろうとする人々の切なる願いに触れることはできたが、それを調査活動に上手く組み込むことができなかった。

調査活動を行う前に、インタビューの内容に地域の安全に対する関心や防犯への意識といった心情面を取り入れることなどが、改善点として挙げられる。

イ 本活動の内容とその意図を、校区内の住民に事前に周知しておくことが必要であった。

地域住民から積極的に街頭での調査活動に協力してもらい、子どもたちが必要とする情報を提供してもらったりすることで、子どもたちはより地域へと目を向け、多くの人とのかかわりの中で自分たちの安全が保たれていることを感じることができるはずである。そのことが、子どもたちにとって「自分の身は自分で守る」ということだけでなく、「地域の安全を守るために、自分には何ができるのか」と、より深く考えることにつながるものと考えられる。



【子どもたちの視点で調査活動を行い、完成した安全マップ】